

# KALS NEWSLETTER 66

2023年1月  
九州アメリカ文学会  
事務局 福岡大学人文学部 大島由起子研究室  
福岡市城南区七隈8丁目19-1  
〒814-0180

## エミリの白のドレス

高橋 勤 (九州大学)

いささか平凡なタイトルだが、エミリー・ディキンソンの白のドレスについてはよく知られている。二十歳前からアマーストの自宅に閉じこもり、白のドレスを好んで身につけていたという話である。そんなエミリーに、隣人たちは「変人」を見るような眼差しを投げかけたに違いない。

ディキンソンは、僕にとっても、長らく近寄りがたい存在だった。白のドレスに象徴される宗教性や死へのオブセッションもさることながら、断片としか思えぬ詩形、そして大文字とダッシュの大胆な使用など、あまりに特異すぎる表現法に、一步踏み出すことができなかったのだ。「タカハシの嫌いなディキンソン。」恩師であったH先生はそう言って笑われた。

ディキンソンとの出会いは必ずしも遅くはなかったのである。大学3年で留学したミシガン大学でのこと。授業で使われたのはトマス・ジョンソン編集の『Final Harvest』、当時ポケット版として普及していたピンク色の教科書だった。ジョンソンのテキストは、1890年刊行のHigginson & Toddが編集した草稿に忠実なテキストから採られたものだが、今思い返すと、このピンク色の教科書がいけなかった。

2000年に刊行されたモダン・ライブラリー版『ディキンソン詩集』では対照的に、画期的な編集が施されている。編者は合衆国の桂冠詩人 Billy Collins だが、コリンズはディキンソンの表記法を大幅に編集し、名詞を小文字に改めたばかりか、ダッシュも大半を削除してしまったのである。いわばコリンズによる改作だが、むしろそうした編集によってディキンソンの詩を現代に蘇らせようと試みたのではないか。いや現代詩におけるディキンソンの影響を浮き上がらせようとしたとも言えるのだ。

おそらく大文字表記を抹消することで浮かび上がるのは、過度な観念性の排除だった。例えば、Snake を snake と小文字にするだけでヘビの象徴性は削がれ、自然性が回復される。有名な一節“A Snake is Summer’s Treason”も“A snake is summer’s treason”と表記されると、子供たちの蛇への恐怖と驚きが、よりリアルなイメージとなって浮かび上がってこないだろうか。いわばコリンズの編集は、武装されたディキンソンの詩の内側に入り、その自然のイメージやリズムを回復する試みであったと思う。

このコリンズに「エミリー・ディキンソンを脱がす」("Taking off Emily Dickinson's Clothes") という詩がある。アマーストの自宅の二階、窓際にたたずむエミリーの白のドレスを一枚一枚脱がそうというのだ。「まず、絹の刺繍飾りを肩から外し/椅子の背にそっとおく」と語り始めた詩人は、やがて白のドレスの内側へと手を伸ばしていく。「私の手が繊維をより分け/スウィマーが水を分けるように/内側へと滑り込む。」

ところが、

十九世紀アメリカの女性の下着の複雑さと言ったら  
なかなか手におえるものではない  
私は極北に向かう探検者のように  
クリップや結び、鯨の骨の留具、紐、かぎをつたって  
かの女の純白な冰山へと渡ってゆく。

周知のように、十九世紀のコルセットはセミ鯨の口の骨(クシ)から作られていた。

そしてようやくコルセットの紐が解けたとき  
かの女の吐息が漏れる  
読者がときおり  
希望が羽をもち、理性は平板  
人生は充填された銃  
黄色い眼で真っ直ぐ見すえていることを知って  
吐息を漏らすように。

## 地区だより 《沖縄地区》

加瀬 保子 (琉球大学)

沖縄地区の最近のご報告をさせていただきます。

山里勝己先生は名桜大学学長を任期満了で2020年3月31日にご退任なさったのち、同年4月から同大学大学院国際文化研究科国際地域文化専攻(博士後期課程)にて特任教授として教鞭を執られておいででしたが、2023年3月をもちまして、ご退職なさることになりました。山里先生はこれまでゲーリー・スナイダーの研究や戦後の沖縄とアメリカの関係についてのご考察などを通して、アメリカ文学研究とアメリカ研究に多大なご貢献をなさって来られました。また日本文学・環境学会会長、アメリカ学会理事、アメリカ文学会会誌編集委員、ハワイ大学アメリカ研究学科大学院研究連携教授、アメリカ文学・環境学会会誌 *ISLE*(オックスフォード大学出版局) 創刊編集委員・編集顧問など要職を歴任されてこられました。そして九州アメリカ文学会においてもこれまで会長や顧問を務められ、学会運営にご尽力くださいました。3月のご退職により、これまでのご活動の節目を迎えられるわけですが、山里先生の長年にわたる教育、研究、大学・学会運営における数々のご貢献とご献身対し、深い敬意と感謝を表したく存じます。

琉球大学の小林正臣先生は2022年11月に *The Multiverse of Office Fiction: Bartleby's at Work* を Palgrave Macmillan より出版されました。本書で、小林先生はアメリカ文学において未開拓の研究領域である「オフィス・フィクション」すなわちオフィス・ワーカーをめぐる文学を体系的に研究なさっておいでです。これまで注目されて来なかったホワイトカラーのオフィス・ワーカーに着目し、その元型をハーマン・メルヴィルの“Bartleby, the Scrivener”(1853)におけるタイトル人物に見出されました。そして、この人物が以後の作品においてどのように〈バトルビーたち〉として再創造されてきたのかを探究し、体系化を行いました。様々なバトルビーの末裔を再発見することで、小林先生は、既存のバトルビー像に依存しない新たな文脈を提示され、研究領域を開拓されました。

## 《鹿児島地区》

千代田 夏夫 (鹿児島大学)

鹿児島地区からのお知らせです。森孝晴先生 (鹿児島国際大学) より、いつもの通り以下のお便りを頂戴いたしました。ご高著のご上梓、心よりお祝い申し上げます。

.....

前回予告をさせていただいた翻訳が掲載されました。『鹿児島国際大学国際文化学部論集』第23巻第2号(2022年9月)に、教え子で現在中国の大学の教員をしている劉鵬氏との共訳「ゴボトの一夜」(ジャック・ロンドン作)が載りました。また、私の新しい拙著が2022年11月に刊行されました。ジャック・ロンドンの知人でロンドンに強い影響を与えたと考えられている薩摩藩英国留学生の一人長沢鼎についての2冊目の本『長沢鼎とその周辺』(高城書房、1500円+税)です。ここ数年書き溜めてきた原稿をまとめたもので、「ジャック・ロンドンと長沢鼎、その後」や「Jack London and Kanae Nagasawa (英文)」などが含まれています。

.....

千代田は日本ポー学会第13回年次大会シンポジウム「ポーと戦争」(9月17日オンライン開催)でパネル「エドモンド・ウィルソンにおける〈アメリカの戦争〉とポー—大西洋間の往来をめぐって」を務めさせていただきました。『英文學研究』第九十九巻掲載の書評(平林美都子編著『女同志の絆—レズビアン文学の行方』(彩流社、2020年))もご覧いただければ幸いです。

## 《熊本地区》

楠元 実子 (熊本高専)

熊本でも今年は寒い冬となっています。熊本アメリカ文学研究会は、引き続き対面とZoomのハイブリッドで例会を続けています。発表者の1時間ほどの発表の後、参加者全員が発言を行います。皆、顔を出して話をしているので、フレンドリーな雰囲気会の会となっています。年末には対面の忘年会ができればと願っていたのですが、コロナ再流行のため、かないませんでした。皆でま

た一同に会することができる日が早く来ますように。さて、前回報告しました以降の研究会の活動を報告致します。

○第159回(2022年9月24日) Zoom/熊本大学にて

題目：自由への希求—Louisa May Alcott & Anna Bronson Alcott Pratt の戯曲 *Comic Tragedies* を読む

発表者：山本 幹樹

司会者：池田 志郎

\* Louisa May Alcott とその姉の Anna Bronson Alcott Pratt の戯曲である *Comic Tragedies* についてのご発表でした。参加者にとっては慣れない戯曲、しかも擬古文体風な作品でしたが、山本先生による6篇の作品の丁寧なご紹介があり、繰り返されるプロットやテーマ、変装などから明らかになる内面など、自由や自立を求める登場人物の未来につながるストーリーとしてお話いただきました。フロアからは表題、仮面・変装、若草物語の映画、現代でも売れるテーマなどについて意見が出され、楽しい時間を過ごしました。オルcottは多作の作家ですので、今後ほかの作品についてもご発表いただけたらと思います。

○第160回(2022年11月26日) Zoom/熊本大学にて

題目：“Seventeen Syllables”と“Yoneko’s Earthquake”の娘の2世アイデンティティを読み取る

発表者：楠元 実子

司会者：池田 志郎

\*はじめに両親が熊本県砥用町出身である Hisaye Yamamoto による熊本の描写やインタビューを親近感とともに眺めました。作家や作品の背景等の紹介を交えながら、短編2作品の特徴や映画との違いについて解説がありました。従来の「1世と2世の衝突」ではなく、逆に娘から母親や家族へ寄り添おうとしている点、母親の願いや創造性を継承している点など「母と娘の繋がり」の深さにスポットライトを当てた読みとなっていました。日本的で包括的な2世アイデンティティについても言及がありました。フロアには、アメリカ移民や砥用町、俳句に関係のある方が多く、会話が弾みました。熊本人気質、母娘、不倫、俳句、宗教等について関連の話題や、新たな解釈を楽しみました。

なお、次回の会は Emily Dickinson の詩についてで、2月18日に開催予定となっています。ご関心がある方は、メールにて楠元 (kusumoto@kumamoto-nct.ac.jp) までご連絡ください。

## 《佐賀地区》

鈴木 繁 (佐賀大学)

前回の地区便りにおいて、佐賀大学教育学部英語科で英語文学に関わる教員の公募が行われている旨をお知らせしましたが、選考は順調に進んだらしく、来春には新しい先生がご赴任なさることになりました。ご専門はどちらかという、イギリス文学に近いとのことで、我々アメリカ文学に携

わる者としては、ほんの少しだけ残念ではありますが、とにかく文学関係の先生をお迎えできただけでも、望外の喜びと言えるかと思えます。

この二年立て続けの英語教員の新規採用に調子づいて、今度は教養教育英語科で三四日の泥鰯を狙って、外国人教員の公募を画策中です。来年度以降の採用に向けて、現在、大学執行部に要望を出している段階です。しかし、根回しが下手なせいも、あまり捗々しい反応を得られておらず、世の中そんなに甘くないと、思い知らされることになるかもしれません。とはいえ大学の作成した書類では、教養教育英語教員の欠員数は現時点で7名と記載されており、せめてその半分くらい補充してくれても、ばちは当たるまいかと思えます。

次回の地区便りでは、皆様に吉報をお伝え出来ますことを楽しみにいたしております。

## 《北九州地区》

齊藤 園子（北九州市立大学）

北九州アメリカ文学研究会の活動について1件ご報告します。

### 第10回特別講演会

日時：2022年11月19日（土）14:00～16:30

会場：北九州市立大学 北方キャンパス

講師：水野尚之先生（京都大学名誉教授、日本ヘンリー・ジェイムズ協会会長）

演題：「Edith Wharton の文学世界」

司会：村田希巳子先生（北九州市立大学非常勤講師）

水野尚之先生のご講演は、コロナ禍ではありましたが、対面式で実施致しました。会員に加えて数人ではありますが、市民や学生も参加致しました。

ご講演の前半は、Martin Scorsese 監督の映画、*The Age of Innocence* の美しく、感動的な映像の一部と Edith Wharton の原文を対比しながら、作品の核心部について解りやすくご解説下さいました。その中で、「Edith Wharton について、作品を読んだだけではわからない、作品執筆に関する裏話が特に興味深かった」、というフィードバックを参加者の一人から頂きました。

後半は、Wharton の経歴と共に、幅広い題材の彼女の詩の中で、初期の詩、愛の詩、戦争の詩、エクフラシス詩をご紹介下さいました。Edith Wharton の詩につきましても、Emily Dickinson に匹敵するかもしれないほど、沢山の詩を書いており、まだ世に出てないものが相当あると拝聴致しました。

最後の質疑応答では、会員の活発な質問に、丁寧にお答え下さり、ヘンリー・ジェイムズの作品 *The Portrait of a Lady* についての質問に対してまで、詳細に熱くご説明下さり、参加者一同、時間が経つのも忘れて拝聴致しました。

薬師寺元子

齊藤からは次をご報告いたします。二年間にわたって推進してきた北九州市立大学学長選考型研究費によるプロジェクト「国際的な取組みへのコミットメントを通じた本学におけるジェンダー平等 (SDG5) の推進」ですが、本プロジェクトも残すところあと二か月あまりとなりました。昨年 11 月には神戸市で開催された模擬国連世界大会に学生と参加しました。また 12 月には、国立女性教育会館 (NWEC) が実施した「令和 4 年度 男女共同参画推進フォーラム」(NWEC フォーラム 2022) に、ムーブフェスタの第二弾となる企画を出展しました。「若者と描こう！ジェンダー平等の未来予想図∞ Ver.2」です。活動報告や調査報告を行った後、参加者間のグループディスカッションの時間を設けました。ディスカッションの進行は学生が担当し、一般の方々も含めた参加者のやり取りは貴重な経験になったようです。来る 1 月 26 日には、その NWEC での出展を踏まえて、「男女共同参画創作落語」を広めておられる口演家のお話を伺う機会を設けることにしています。なお、本プロジェクトに関わる拙稿 (研究ノート) を、『北九州市立大学外国語学部紀要』第 155 号に掲載しました。

折しも担当ゼミの学生たちが、アメリカ研究や英語圏文学、ジェンダー研究に関わる卒業論文を仕上げたところです。学生の視点は文学作品や文化、あるいはジェンダーをユニークな視点で果敢に捉えなおすものばかりで、文学・文化研究の今後は明るいものとうれしく思っております。

## 九州アメリカ文学賞への応募募集

九州アメリカ文学賞 (新人賞) への 応募をお待ちしています。電子メールによる応募のみの受付です。以下の宛先まで原稿をお送りいただきますようお願いいたします。

締切：

2023 年 2 月 20 日

提出先：秋好礼子 (福岡大学) reikoa@fukuoka u.ac.jp

応募の際は件名欄に、「九州アメリカ文学賞論文応募」と明記して下さい。応募の詳細に関しましては、以下のリンクをご覧ください。

[http:// www.kyushu-als.org/news/article/40](http://www.kyushu-als.org/news/article/40)

## 九州アメリカ文学会第 68 回大会発表者募集

九州アメリカ文学会第 68 回大会は、以下のとおり開催いたします。

日時：2023 年 5 月 13 日 (土)、14 日 (日)

会場：鹿児島大学郡元キャンパス

特別講演：成田雅彦先生 (専修大学)

シンポジウム：「アメリカ文学とデジタル・ヒューマニティ」(仮題) 司会 岡本太助先生 (大阪大学)

下記の要領で研究発表を募集いたしますので、ふるってご応募ください。

締切：2023年2月末日

提出先：高野泰志（九州大学）takano@lit.kyushu-u.ac.jp

レジュメの様式：日本文の場合500-800字程度とし、数行の英語の要旨または数語のキーワードを文末に付加すること。英文の場合は300語程度。作家名と書名は原則として原語綴りに統一。

## 日本アメリカ文学会第62回全国大会発表者募集

日本アメリカ文学会の第62回全国大会（2023年10月21日（土）、22日（日）、於：札幌学院大学江別キャンパス）にて研究発表を希望される方は、以下の要領でレジュメを提出ください。

1. 締切：毎年3月31日（九州支部事務局必着）。
2. 提出先：九州支部事務局 oshima-y@fukuoka-u.ac.jp
3. A4横書きのレジュメ（和文の場合1200字程度、英文の場合400 words程度）と略歴を、次の方法で支部事務局に提出すること。なお、発表タイトルと氏名は英訳したものを併記し、作家名と書名は原則として原語綴りに統一すること。
4. 略歴は次の項目を記載してください。
  - ・氏名
  - ・住所（郵便番号をつける）
  - ・e-mail address および電話番号
  - ・最終学歴
  - ・現在の所属（非常勤講師は（非）、院生は（院）とつける）
  - ・研究業績（過去3年間の口頭発表、掲載論文は、タイトル、発表年月日、掲載誌を記すこと）
5. 全国大会開催支部以外の支部に所属している現役大学院生ないし申請時に大学院修了または退学後3年以内で常勤職を持たない会員で大会において研究発表を行う者に対して、本部より一人一律2万円の旅費補助をすることになりました（「本部会費」を納入している支部が「所属支部」となります）。申し込みについては支部を通じて手続きや連絡を行うこととなります。上記4の略歴によって申請条件を判断しますので、最終学歴と現在の所属を明確に記載するようにしてください。
6. その他：Wordで作成したレジュメと略歴のファイル（.docまたは.docx）をメールに添付し、支部事務局へ送信する。レジュメのファイル名は、「全国大会 レジュメ自身のフルネーム」、発表者略歴のファイル名は、「全国大会略歴 自身のフルネーム」とする。カギ括弧を必ず付ける。

## 『九州アメリカ文学』第64号投稿募集

「九州アメリカ文学」第64号は会員の皆様からの論文投稿をお待ちしています。

締め切り日 2023年4月30日

投稿規定につきましては、HPをご参照ください。

## 九州大学名誉教授 野口健司先生ご逝去のお知らせ

九州アメリカ文学会を長い間支えてくださいました野口健司先生が、令和4年12月26日にご逝去されました。野口先生は、学会や例会で、常に厳しくも暖かいアドバイスを私たちに与えてくださいました。

私個人は、九大教養部に入学して最初の年、野口先生の授業を受けて、厳密な読みの中にアメリカ文学の面白さを感じたことを思い出します。アメリカ文学の研究の道に進む道筋を示してくださいました恩師の一人です。寂しくなりました。

野口先生のご業績やお人柄を振り返る場を設けるべきですが、まずは取り急ぎ学会員の皆様にお知らせいたします。  
(江頭)

### 編集後記

KALS会員の皆様、大変お待たせしました。NEWSLETTER66号をお届けします。原稿をお寄せくださいました皆様に、心からお礼を申し上げます。新型コロナ後の世界もまだよく見通せませんが、今年もアメリカ文学をエナジーとして頑張ってまいりましょう！

ニューズレター担当 江頭 理江 (福岡教育大学)